

VI トロール漁場座談会

主催 海外トロール漁業協会
水産海洋研究会

主 題 海外新漁場開発について
日 時 昭和42年11月24日午後1.00～午後5.30分
場 所 大日本水産会々議室（三会堂ビル8階）
コンピーナー 宇田道隆（東京水産大学）

話題および話題提供

北太平洋底魚漁場とその資源の動向	多々良 薫（遠洋水産研究所）
ソ連のトロール船について及び 水産庁新船開洋丸についての情報	小 山 武 夫（東海区水産研究所）
海外漁場開発の大勢と将来	恩 田 幸 雄（水 産 庁）
メルルーサの資源について	池 田 郁 夫（遠洋水産研究所）
北米大西洋岸沖合漁場調査	佐 藤 芳 三（日本水産株式会社）
世界的な海底資源開発に関する大陸棚・ 陸棚斜面の地形・地質に関するいくつかの問題	星 野 通 平（東 海 大 学）
アフリカ、南米沿海トロール漁場開発に 関連する新知見	宇 田 道 隆（東京水産大学）

1 北太平洋における底魚漁場の開発と現状

多々良 薫（遠洋水産研究所）

1 まえがき

ベーリング海およびカムチャツカ半島沿岸を含む北東太平洋の底魚漁場において、日本は大規模な底魚漁業を営んでおり、その漁獲量は年間約100万トンに達している。またソ連は北部太平洋で100万～150万トンの底魚を漁獲していると云われ、日ソともこの数年漁場は米加沿岸に拡大している。米加では古くからこの水域においてオヒョウ延縄漁業を営んで来たが、近年その他の底魚類の開発についても関心が持たれている。

ここでは、まず漁場開発の経過と現状について述べ、次に同一の資源を利用する国々との関係とくに日米加漁業条約第14回年次会議の底魚に関する問題について報告したい。

2 漁場開発の経過

北東太平洋の底魚漁場は、第1図に示すようにベーリング海を除けば大陸棚の発達が悪く、限られた沿岸水域である。夏期には北部をのぞいて大体全域の陸棚とその斜面が漁場となるが、冬期にはアジア側沿岸やベーリング海の中中部以北は寒さがきびしく、アリューシャン列島やベーリング海南東部より北米西岸までの水域だけが漁場となる。